

竹本織大夫の忠九

上半段を聞く

同人 森下辰之助

織大夫の忠九上半段は今度の文樂座若手興行の呼び物である然し此忠九の上半段のみを語らす事は織大夫に對し適役であつたと云ひ得ない、彼には忠九全一段を語らす事が適當であるのみならず大夫も亦徳であつた事は云ふ迄もない、實際忠九の如きものを二分する事が抑も不合理であると共に語り手に對しても氣の毒である、若手興行と銘打つて九段目を語り得るものとしたからは全段を語らす事が本當である。一體淨瑠璃と云ふものが總て上半段に重きを置くべきものたる事は論を俟たぬ事で、其上半段は六つかしくて聞手に喜ばれない、下半段は語るには安くて聞手に喜ばれる、譬へば寺子屋にせよ、源藏戻りだの首實檢がある、後段には場面の變化が多く、松王の泣笑ひとか、いろは送りとか語り安くて面白い。伊賀八の如き、陣屋の如きも殆んど一樣に上半段には變化が少なくて六つかしい割に面白くない、忠九にしても無論その通りである、下半段の本藏の出からは大きくて山や谷が多くて面白い、そして聞手にも面白く聞かれる、前半段本藏の出まではうるさい、そのうるさい

語り場丈けを語るものは全く損である、それも腹の弱い聲のよい人（譬へば駒大夫の如き）ならば兎も角、血氣盛りの然かも腹も聲も無類の強味を持つ織大夫に全段を語らさぬなどは語り手も損、聞手も損、これが全く兩損と云ふものだ、こんな事をする位なら、織大夫と相生大夫と呂大夫の三人を一日替りとか二日替りとか三日替りとかにして、全段づゝ語らす方が法に叶つたやり方だと思ふ。此の以前にも九段目を折半して土佐大夫と津大夫とに語らして、謗者から非難を受けた事がある、實際忠九は其の全段を語りてこそ眞價があるのだ、折角の名玉を二つ割にして丁ふなどは如何に興行政策とは云へ、苟も日本唯一の淨瑠璃殿堂文樂座でやるのは郷土藝術の保存上から一種の後道的だと云はねばならぬ、今後はどうかこんな事はやめて貰ひたいものだと思ふ。

私の所論や希望は此位にして、此上半段の批評を試よう、先づ「引立入りにける」の送り、どつしりと結構であつた「人の心の奥深き山科のかくれ家を」の枕これ亦重味もあり品もよく太したものであつたが。人の、心の、おく、の足が同じ抑揚であつたのは考へものではなからうか、此語り風は忠九として傳統的に傳へられて居るものとは確かに違ふ、數十年來私の耳にのこる大様、法善寺、越路の語り風はこうでなかつた、或は大隅（先代）の風なのか、何にせよ同じ足の揃ひ方と聞取つた、「加古川本藏行國、が女房戸無瀬」のがの切り方が故らに耳に立つ

たのも感心出来ぬ「刀脇さしさすがに行儀亂さず庵の戸口」は立派な出来だ「頼みませう」と云ふ聲に「は無難であつたが、」縛はすして飛んで出る、昔の奏者今のりんは稍重くろしかつた「先づお通りなされませう」も、同様の感じ「ササ御案内頼みます」これも稍重くて氣分の變化に乏しかつた、「モわたいが役の二人前」も亦氣分が出て居ない、モ少しるみを含んだ稍追従染みた口調でやつて欲しかつた、すると、奥のお石の「是は思ひもよらぬ仰せ」以下が配合の上からもよく然かも引立ち、人形の腹が表はれ、所謂活殺自在と云ふ事にならうと思ふ「外々へ御遠慮なう遣はされませう」のつかはされませと刻んで「申さるゝで御座りませう」をすつと語つたが、大様も越路もこれと反對で「つかはされませう」をすつかり云ふておいて「まうさるゝでござりませう」のさるゝを一寸激んで刻み氣味に語つて「でござりませう」をすらゝと語つた事を記憶して居る此二つの風のどちらがよくてどちらが悪いは限定できないが、其前後の文意即ち「ハテモたのみをつかはしたと云ふではなし」の文意と「聞いてハツとは思ひ乍ら」の文意とを考へて見るとどうも大様や越路の語り風の方が情味の上から理窟に合ふて居る様に思はる「そこをゆるすが娘のかはいさ」をすらゝと語つたは感服出来ぬ、此の句はどうしても憂ひでなくちやならぬ「天下晴れての力彌が女房」は文意の氣分が出て居ない「ム、コリヤ面白い」のお石の詞は今少し冷笑まじりの氣味があつて

よいと思ふ、「母様どうぞわびごととして祝言させて下さりませ」と随り歌けば「は情の表はし工合と云ひ足取りと云ひ實にうまいものだ、こう云ふ處が上手下手の別れ目だと染々織太夫のうまさ心かけのよさを満喫した、「まさつた娘」のまさつたテツ「義理もコリヤ忘れたな」は指導がわるい、こんな處は憂ひの所ぢやない、悲憤の語調でなくちやならぬ、さばかりは申分ない出来だ、殊に「力彌様より外に餘の殿御わしやいや」と一筋に「はどうやらすると連葉娘の駄々になる處だ、最近某大夫のB放送を、本誌で黒頭巾氏がハイカラ娘の駄々としか聞えな」と批評された事があつたが、流石に織太夫だ、戀を立ぬくおぼこ娘の眞劍的の決心と聞え、然かも何處までもいやしくなかつたのは全く絶讃に値すべきである「何事とはエ、曲がないわいの」も情味一ぱいでよかつた「悦んで御座る中へ」のこざるはテツ「鳥類でさへ子を思ふに」以下「振り上る双の下まで實に申分ない立派な出来であつた（尋常に座をしめ）は變化が足りなかつた、」齡はようゝ薄手計り、殿はやみゝ御切腹」も云ひ分なく、「ササ否か應かの返答をと鋭き詞の理窟づめ」と共に寸分のすぎなき語り口で、これ以上は望まれぬ程の素晴らしい出来だ、「途方にくれし」で残念ながらお仕舞だ扱こう文句は云ふものゝ此六つかしいものをこれ迄うまく語り得たのは全く驚歎に値すると云ふも決して過賞ではない。三味線もまづ相當の出来榮であつたが一箇所耳にさはつたのは

「姑去りはマ心得ぬ」の所である。

人形は「そんならば申しませう」で戸無瀬が膝すりよせたのはよくない、「ム、コリヤ聞き所お石様」で膝すりよせるのが合理的だ「忤力彌に祝言させう」で戸無瀬と小浪があわてふためき客をわらはすなどは以ての外だ、若しこれが人形の型だと云ふのなら改むべき型だ、淨瑠璃の文句を味ふてほしい、「そりや眞實か誠か」或は「少しは心休まりて抜いたる刀さやにおさめ」をどう解釋して居るのか斯る場當りは改める事が人形造の爲めであると思ふ、敢て苦言を呈して反省を促すものである。

(十二月三日見聞)

補遺

Ⅱ 本稿記述後一週間即ち十一日に再度聞いて非常に改まつて居つた所、我意を得た處を記さう「サ、御案内頼みます」は輕るく氣分の變化もよくなつて居つた、殊によかつたのは「義理も法もコリヤ忘れたなあ……」が三日には單に憂ひの詞と泣きおちの傾きであつたのが、全然悲憤とくやし涙に變つて居つたは云ひ分のない改善であつた、欲しがる所は山々以下「尋ねる親の氣は張弓」は何と云ふ息のつんだこと一寸否一分のすきもない大淨瑠璃、此の息、此の氣合、どうか携ます驕らすまつしぐらに進んで貰ひたい！。(完)

義大夫人と文學 宇野浩二

「義大夫は音曲の長」といふ文句がある。同じ音曲でも、長唄、清元、常盤津、その他は中年から始めても、或る程度の人並すぐれた才能があれば、稽古次第で、二、三流の名人ぐらゐになり、商賈人になれる可能性があるが、義大夫にはさういふ可能性が全くない、といふ事が右の文句を裏書する一つらしい。

文樂の大夫に「大序」といふのがある。「大序」の大夫といふのは朝の暗い内に、客など殆どゐない時に、おまけに御座の中で、然も十二人の大夫が一人一分間ぐらゐづ、語るものであるから、相撲でいふと、裡かつぎ以下であるところが、東京に、某といふ年五十歳で三十年ほど義大夫を稽古してゐた人があつた。某は名人清元梅吉が「二十三年辛抱してくれたら、自分の糸で立派な清元の大夫にしてみせる」といふのを斷つて大阪へ行き、文樂の古靱大夫の門に入つて、やつとこの「大序」の大夫になつた。——この話も前の文句を裏書する一つであらう。

ところが、もう一つ、前の文句の裏書になるのは、文樂の大夫の稽古は、他の音曲の如く師匠が決して直接に教へない、聞き覚えて一人で習得するといふ事である。

私は、これ等の話を思ひ出す毎に私たちのやつてゐる文學の修行にも負けない程の修行が他の世界にもあるものだと思ふのである。